



青磁犬鷹香合 龍泉窯  
中国 明時代末期(15世紀)  
高5.7 径6.0 (cm)

### ◆◆◆ 館蔵品紹介 ◆◆◆

今回ご紹介するのは、桃の実をかたどった香合である。香合とは茶席などで焚く香を入れておく蓋付の器のこと。桃山期以降、炉中の炭を客前でつぐ「炭点前」が確立する。炭とともに持ち出されるようになると香合に注目が集まり、茶席の趣向や季節に合わせた様々な形や素材のものが用いられるようになった。写真の香合は明るく澄んだ空色の青磁で、潤んだようなつややかな釉調が桃の実の瑞々しさを思わせる。

桃は中国原産の植物でその果実は邪気を払う、あ

るいは食べると不老不死になるとして尊ばれた。その思想は日本にも伝わり、雛祭(上巳の節句)で桃の花を飾る風習に見られるのは良く知られるところである。またそのようなおめでたい果物であるが故に、食器や文房具、衣裳など様々な工芸品の意匠に用いられている。桃型香合も青磁の他、色絵や染付等の陶磁器類や木地、漆製品などで作られ香合の中でも比較的数量が多い。

写真の香合は単に実を象っただけでなく、その上に向かいあう動物と鳥をのせている。このような発想がいったいどこから来たものなのかは不明であるが、鷹狩用の犬と鷹を思わせるということで、日本

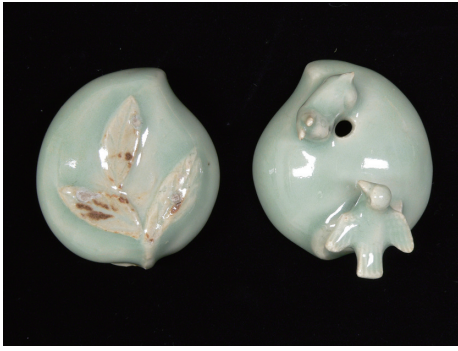


写真1

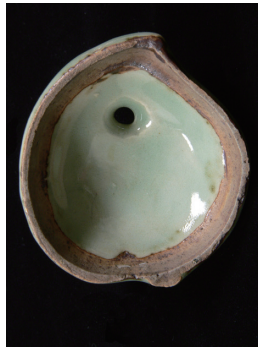


写真2

では「犬鷹」と呼ばれるようになった(ちなみに大小の鳥を乗せたものもあり、こちらは「鷹々香合」という)。写真1で底裏と蓋表の様子をご覧いただいているが、香合の底裏には桃の葉が3枚浮彫で表され、その茎が鳥の足元にまで伸びている。そして、ここでお気づきの方もおいでであろう。そう、この香合、蓋に穴が開いているのです！

本来容器であるはずの香合に穴が開いているのは異例のことで、もしこれが水滴として作られたのなら、もうひとつ穴が必要であろう。穴の開口部はきれいに整えられており(写真2)、何か用途がありそうであるがまだ謎である。ちなみに先日拝見した静嘉堂美術館の「～かおりを飾る～珠玉の香合・香炉」展(～8/13)に三日月形の合子(蓋付容器)で、犬鷹香合よりも少し大きめの穴がひとつ開いた作品(五彩人物文三日月形香炉 中国・明時代)が出品されていたが、こちらは香炉に分類されていた。やや大きめの香合として用いることができるサイズであったので興味がひかれた。

青磁犬鷹香合は中国製の形物香合(型で成形された香合)であり、同形の品が複数日本にもたらされている。その内のひとつが昭和美術館(愛知県名古屋市)所蔵されており、当館の犬鷹とは異なる場所に穴を埋めたような不定形のへこみが見られたので気になっていた。先日学芸員の後藤みつ子氏からお話をうかがうと共に、また蓋裏の写真お送りいただき、蓋表と同じ位置に浅いへこみができている様子を確認することができた。後藤氏によると、なにか窯道具を当ててしまったように見えるとのことで、穴を塞いだ跡ではない可能性もあるが、もうひとつ大変面白い写真もお送りいただいた。同じく昭和美術館蔵の、江戸後期の京焼陶工、仁阿弥道八が写した青磁犬鷹香合の蓋裏の写真である。紙面の都合上ここでお見せできないが、当館の犬鷹香合(写真2)

とほぼ同様の位置にきれいに整えた穴がある。道八の香合の穴は犬の腹部にあるが貫通していないため表からは確認できないとのことである。はたして道八はこの穴の意味を理解していたのであろうか。

また石水博物館(三重県津市)所蔵の『形もの香合記』という彩画と注釈入りの本では青磁犬鷹香合の蓋裏をわざわざ示し、当館蔵の犬鷹と同様の位置に「穴有」と記している(注1)。ただしこの図では蓋表に穴はみ

られない。本来別の用途で製作された外国製の器物が日本の茶人たちにより香合に見立てられることは多い。しかし犬鷹香合の穴の位置は様ではなく、本来の用途を推測するにはより多くの情報が必要である。もしこの香合をお持ちの方がいらしたら、穴についてご一報いただけたらと思っている。

江戸後期以降、形物香合の人气が高まり、安政2年(1855)には「形物香合相撲」なる番付表が発行され、昭和に至るまでその格付けが茶人達に影響を与えてきた。その中で青磁犬鷹香合は「東 二段目 四位」。当館の犬鷹も持ち主が点々と変わり、付属する由来書からこの香合はまず大阪の大庭屋平井家旧蔵と判る。大庭屋は江戸時代、御用商人としておそらく大名貸しをしていた両替商とされる。十代平井治朗右衛門美英(天保14～明治41年1843-1908)は遠州流の茶道を学び貯月菴宗従と号し、江戸から明治へと社会が激変する時代に数多くの茶会を催し、『茶会々記集』(平井家蔵 注2)等を残している。この茶会記の中での青磁犬鷹香合の使用記録は、慶応2年(1866)10月15日から12月14日に延々行われた会と、明治17年(1884)3月27日午後4時からの会の2回ある。

その後伊木三猿斎(忠澄 備前、岡山藩家老で茶人)の蔵となり、加藤半蔵庵(正義 実業家・日本郵船副社長)、由来書にはないが中野春山(忠太郎 新潟の石油王)、畠山家を経て遠山家に伝わった。

(井上 則子)

注1『茶人のあそび心 形物香合 番付の世界』

展覧会図録 野村美術館学芸部・愛知県陶磁資料館学芸課編 平成25年 p.92

注2『大阪市史料第48輯 大庭家平井家茶会々記集一貯月菴宗従茶事記録一』 平井勝彦・市村祐子編 大阪史料調査会刊 平成9年 p.2,p.55

## 遠山記念館所蔵の<sup>おおくに はくさい</sup>大國栢斎の釜について

依田 徹

遠山記念館では、現在8点の釜を所蔵している。いずれも平成2年(1990)刊行の『遠山記念館所蔵品目録Ⅰ』に掲載されていないが、これは同書刊行後に、遠山家から追加寄贈されたという理由による。これらの釜は遠山元一の妻である、遠山愛子が所持し、実際に茶会で使用していた釜である。この愛子の釜コレクションに何か特徴がないかと探す時、一つに大國栢斎の作品が3点も含まれている点が挙げられる。

最初に、この大國栢斎という人物について確認したい。現在は茶道界でも取り上げられる機会は少ないが、大阪を代表する釜師の名家である、大國藤兵衛家の2代目に当たる。生年が安政3年(1856)であるが、当時はペリー来航から3年目という時期となり、幕末の動乱期に向かう最中であった。茶道具の生産も次第に下火となっていき、明治維新後はこれに拍車がかかった。それでも鉄瓶は実用品としてまだ需要があったが、その鉄瓶も京都の龍文堂が人気を博すようになり、大阪における釜師の生計は苦境となる。明治30年代の頃、幼馴染であり、東京美術学校の教員として活躍していた<sup>せうせい</sup>鑄金家・岡崎雪聲の勧めで釜の制作に戻ったとされる。明治40年には日英博覧会で金牌を受けるなどの活躍を見せ、大正4年(1915)には杉孫七郎(聴雨)より「栢斎」の号を贈られ、充実した制作時期に突入していった。

続いて当館所蔵の釜3点を見ていきたい。最初に見る「松葉地文棗釜」はやや小型で、主に初夏から秋にかけて風炉に載せて用いる風炉釜である。形状を見ると、肩と腰がなだらかな稜線を描いてすぼまっており、棗の果実に似ることから「棗形」に分類される。肌は荒らして作り、表と裏にそれぞれ松葉の意匠を散らす。この松葉の意匠に合わせて両肩の<sup>まつかき</sup>鑲付も松毬形となっており、銅製の一文字蓋には<sup>くちなし</sup>梔子形の摘みが付く。



図1 大國栢斎「松葉地文棗釜」

2点目の「小桜釜」はやや大型で、秋から初春にかけて用いられる炉釜である。胴はやや扁平な球状をしており、口は垂直に長く立ち上げる。このような口造りを特に「甌口」と呼んでおり、釜の形状も「甌口形」に分類されることがある。やはり肌は荒らして作り、胴の表裏には桜の花弁を散らす。特徴的なのは、類例を見ない形の鑲付である。四角く板状に立ち上げて、その外側の角をやや尖らせている。この鑲付と甌口が、球状の胴部と好対照となり、全体で力強い印象を生み出している。



図2 大國栢斎「桜釜」

3点目の「福寿字文袋釜」も、炉釜である。扁平な銅はやや肩を張り、立ち上がって外反りする口造りは、「繰口」の形状に分類される。首の付け根には二条の帯をまわし、外反した口縁部には刻み目を入れることで、宝袋を模した器形とする。さらに胴に「福」と「寿」の文字を鑄出することで、この吉祥意匠を引き立てている。蓋は二つ附属し、一つは唐銅で、甲の中央をやや盛り上げた盛蓋となっている。もう一つは釜と同じ鉄で出来た共蓋で、こちらはやや甲をくぼませた掬い蓋となる。



図3 大國栢斎「福寿字文袋釜」

コレクションという視点からこの3点の釜を見ると、どんなことが言えるであろうか。現在の遠山コレクションの中核となる茶道具、例えば大名物である「玉垣文琳」は、戦争の最末期まで徳川宗家が所持しており、戦後の蒐集であることが明らかである。この他、長次郎の黒楽茶碗なども、戦前のコレクションが散逸する過程で、遠山家に納まっていったものと推定される。

しかし栢斎が昭和9年(1934)に死去していること、また同時代作家のものを中古で購入したとも考えにくいことから、昭和戦前期に遠山家で購入したと見るのが妥当である。また愛子は裏千家流であったとされ、同流では大西清右衛門、宮崎寒雉、佐々木宗彦といった釜師が人気となっていた。そうした中、栢斎の釜のみ3点もある事実は、遠山愛子が好んで栢斎の釜を欲しがったという状況を推察させる。

しかし当館所蔵の3点の内、「小桜釜」「福寿字文袋釜」は、共にケレンミのある造形を見せる。釜は鉄という無骨な素材の肌を味わう工芸作品であり、中でも栢斎は釜肌を荒らして作る技量に定評があった。当館の釜を見ても、いずれも釜肌は鋳型を藁束等で荒らして作り、女性向きとは言い難い。

ただし、当時の栢斎の評価を考えれば、帝国美術院展覧会(以下「帝展」と略、現在の日展)で活躍する官展の作家であった点が重要となる。昭和2年、帝展に第四部となる「美術工芸部」が設置された。それまで日本美術協会や農商務省美術展覧会を主たる活動の場としていた工芸作家たちは、絵画や彫刻と同じ、帝展という舞台に参加することを悲願としていた。この帝展に栢斎は釜を出品しており、金沢の名工として知られる宮崎寒雉とライバル関係にあったとされる。そうした意味では、栢斎は全国区に名の知られた、高名な釜師だったことになる。

なおこの帝展で金工の審査を行っていたのが、香取秀真である。東京美術学校出身の秀真は、先述の岡崎雪聲の教え子にあたる。この雪聲と栢斎が幼馴染の関係であり、秀真は栢斎より18歳年少という年齢差であった。しかし秀真は東京美術学校において近代教育を受けたエリート作家であり、近代化を進める工芸界をリードしていたのである。

もう一つ、栢斎が重要な意味を持つのは、貞明皇后の茶釜を制作したという来歴である。大正天皇妃である貞明皇后は、大正天皇の崩御にともない皇太后として隠居し、昭和5年に赤坂御用地の大宮御所(青山御所)へと移った。この時、大宮御所には四畳半の茶室が作られ、皇后自ら「秋泉の御茶室」と命名している。この「秋泉の御茶室」の竣工に際しては、京都の三千家、藪内家、および茶室設計を担当した三代木津宗詮(聿斎)から茶道具が献上されている。この献上茶道具に関しては、川上邦基『秋泉御茶室御用具』(昭和5年)に、一覧と一部の写真が掲載されているが、そこには釜に関する記述がない。この

時、釜だけは別に、貞明皇后の実子である秩父宮雍仁親王から献上されていたのである。



図4 大國栢斎「誉れの茶釜」  
(戦災消失、『名人釜師大國栢斎』より転載)

『名人釜師大國栢斎』(真賀根美術店、昭和11年)には、この釜が「誉れの茶釜」の名前で紹介されている。やや扁平な真形釜で、胴に踊り桐の意匠を表し、盛蓋の上に菊形の摘みが付く。皇室らしい、菊桐の意匠の釜である。

この釜が制作された状況については、先述の『名人釜師大國栢斎』に加え、正木直彦『十三松堂日記』(中央公論美術出版、昭和40年)に記載がある。昭和4年、秩父宮は釜の献上に関して、東京美術学校校長であった正木に諮問を行い、正木はしかるべき作者として栢斎を推挙した。こうして栢斎が制作した下絵が秩父宮に台覧され、意匠が決定される。栢斎は斎戒沐浴して制作に臨み、2点の釜を制作した。1点が献上されると、貞明皇后から「殊之外思召に叶ひたるよしを作者に伝へよ」と言付けがあり、栢斎はこれに感涙してむせび泣いたそうである。残ったもう1点については、民間にあるのが畏れ多いという理由で、金槌により壊されたと報道された。残念ながら、貞明皇后の大宮御所は昭和20年3月の空襲で焼失し、茶室および「誉れの茶釜」を含む道具類も、烏有に帰してしまっている。

この栢斎による釜の献上は新聞等で報道され、大阪毎日新聞には「皇太后様へ御茶釜を献上遊ばさるおやさしい秩父宮殿下」という見出しも載った。このため、当時の茶道界にとっては、秩父宮が栢斎の釜を献上したという事実は、広く知られていたはずである。愛子が栢斎の釜を求めたのは、この皇太后への献上釜と、同じ作者の釜が欲しいという理由からだったのではないだろうか。あるいは、「誉れの茶釜」の記事を読んだ元一が、その親孝行の美談に共感し、栢斎の釜を求めた可能性もあるだろう。

当館の所蔵する栢斎の釜は、昭和戦前期の一流行を物語る蒐集品と位置付けられる。

# お知らせ

今秋から来春にかけて美術館改修工事のため、当館でのコレクション展覧はございません。その間、県外で展覧会を開催することになりましたので、ご案内いたします。

秋田市内で平成元年より充実した美術館活動をされ、県内外の美術愛好家から親しまれております秋田市立千秋美術館からのお誘いを受けまして、このたび遠山記念館名品展を開催する運びとなりました。「至高の日本美術」というタイトルをいただき、当館所蔵品の日本美術の分野から「佐竹本三十六歌仙絵 頼基像」<sup>よりもと</sup>、「寸松庵色紙」<sup>はなぶさいちやう めのさらしまいず</sup>、「秋野蒔絵手箱」<sup>はなぶさいちやう めのさらしまいず</sup>、英一蝶「布晒舞図」などの重要文化財をはじめとした65点の書画工芸品を厳選した出張展となります。

広い会場でゆったりと美術を楽しめる、秋田の千秋美術館で、東北地方の方に遠山記念館の名品をお楽しみいただく、またとない機会になるでしょう。

お近くへご旅行される方は、ぜひお立ち寄り下さい。当館で作品をご覧になるのとは違った、新しい出逢いや発見があるかもしれません。



## 遠山記念館名品展 至高の日本美術

開催場所：秋田市立千秋美術館 〒010-0001 秋田市中通二丁目3-8 (アトリオン内)  
JR秋田駅西口から徒歩5分 電話 018-836-7860 (代)

会 期：2017年9月23日(土)～11月5日(日) 会期中無休

開館時間：午前10：00～午後6：00 (入館は午後5：30まで)

入 館 料：大人1,000円 大学生700円



## 遠山邸2階の特別公開日のお知らせ

中棟2階の洋風を加味した応接室と寝室、数寄屋座敷の秋の公開は9月9日(土)、10月14日(土)、11月3日(金・祝)午前11時から午後3時までになります。



## これからの催し物

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を

### 手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 21

日時：2017年11月3日(金・祝) 午後1:30～2:30

会場：本館大広間 定員：50名(先着順) 参加費：入館料のみ



和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会パート19を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。

## 平成28年度 新収蔵品

昨年度、つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。

心より感謝申し上げます、ご紹介いたします。

### ①山本 象成 様(岐阜県土岐市)

山本象成様作品 「耀彩志野茶碗」



### ②島田 紀子 様(東京都目黒区)

手遊び人形(お座り人形・這い這い人形) 昭和時代



### ③小林 桂子 様(東京都目黒区)

小林桂子様作品と試作品及びコレクション(世界の染織品、染織用道具など)624件、また染織関係の書籍等108冊。

(詳細は追って学芸員ノートに掲載予定)

写真：小林桂子様作品 絹紋織ポンチョシリーズの内  
「Hydrangea(あじさい)」



## 昨年度の催事報告

### 「染織にみる吉祥模様－福を招くかたち－」展関連

2016年6月4日(土)

土曜講座「日本染織にみる吉祥模様」

### 「竹岡雄二 台座から空間へ」展関連

2016年7月10日(日)

アーティスト・トーク「台座から空間へ」(写真)



中央右が竹岡雄二氏

### 「茶と花－座敷飾りの美術－」展関連

2016年10月8日(土) 土曜講座「美術から見る芸道の世界」

2016年11月6日(日) 記念茶会(呈茶：埼玉県茶道協会)

### 「酉と縁起物」展関連

2017年1月29日(日) 第8回お座敷美術講座・特別編「茶席で見よう！寸松庵色紙」

(※なお天候の都合により「寸松庵色紙」は別室展観席での見学に変更)

### 「雛の世界－日本人形の美と系譜－」展関連

2017年2月4日(土)・2月5日(日)・2月19日(日)

親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク「投扇興遊びと展示解説」

(共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」)

2017年2月18日(土) ご当地グルメとコラボレーション！

古今雛 遠山邸2階での特別展示と郷土料理「かわじま呉汁」を楽しむ会

2017年2月25日(土)～3月3日(金) 「雛祭りの日」ガイドツアー

2017年3月5日(日) 「遠山記念館 雛祭りの茶会」

### お香の会

2016年5月8日(日) 板橋陽子様

2016年10月23日(日) 板橋陽子様

2016年11月20日(日) 三浦利子様

2017年2月12日(日) 板橋陽子様

### 公開茶会

2016年5月3日(火・祝) 佐藤宗雲様

2016年5月22日(日) 三浦利子様

2016年5月28日(土) 埼玉大学茶道研究会

2016年10月23日(日) 佐藤宗雲様

2016年11月13日(日) 遠藤宗幸様

2016年12月17日(土) 埼玉大学茶道研究会

### その他

2016年5月3日(火・祝)・11月3日(木・祝) 手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会Part18、19

2016年7月16日(土) 第8回ゆかたの着付け教室

2016年9月17日(土) 第7回お座敷美術講座「茶席で見よう！志野茶碗」

2017年3月11日(土) ふるさと歴史講座(共催 川島町教育委員会)

投扇興を楽しむ会 毎月1回開催 計12回開催

## 美術館改修工事による展覧会の休止と、邸宅の通常公開について

昭和45年(1970)の開館以来、コレクションの展示活動をしてきた美術館は、建築家今井兼次の設計になるモダニズム様式の建築で、今井兼次最後の作品になります。外装と内装を改変することなく、建築細部にちりばめられたこだわりの意匠も維持してきましたが、美術品を展示する環境や空調設備、照明設備なども古い形式のままでした。そうした環境を最新のものに改



修する工事をこの7月より実施しております。今井兼次の設計デザインを可能な限り損ねない改修計画で、工事を進めています。

来年の3月までは工事と検査になりますので、その間は美術品の展示活動は休止をいたします。何卒ご理解をいただきますようお願いいたします。なお、遠山邸と庭園は、通常の通り公開をしております。入館料は割引の 大人500円になります。安全誘導をさせていただく時があります。ご不便をお掛けしますが、ご協力のほどをお願いいたします。尚、美術館公開は平成30年(2018)4月1日を予定しております。

### 利 用 案 内

- ◇入館料 **\*美術館休館中の特別料金**  
大人500円 学生300円  
中学生以下は無料
- ◇開 館 午前10:00～午後4:30  
(入館は午後4:00まで)
- ◇休 館 月曜日(祝日の場合は開館、翌火曜日)  
12/21～1/6
- ◇美術館 平成30年3月31日まで休館中  
(邸宅・庭園のみ公開)
- ◇詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。  
URL <http://www.e-kinenkan.com>



#### 電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅 ●西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅  
いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

#### お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第53号

2017年7月 発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館  
編集担当 井上 則子

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007  
FAX 049-297-6951